

考えられているが(注3)、同型式の出土する、時屋地区上の原第2遺跡、第3遺跡や白ヶ野第2・第3遺跡では、初期押型文土器は共伴せず、近隣にありながら、受容形態が異なっている。

南九州一帯に分布する貝殻文系土器は、最も古く位置付けられる前平式から確認されており、口縁直下に棒状工具による刺突を行い、胸部に深い条痕を行う一群が、前ノ原第2遺跡で多量に出土している。しかし、後続する吉田式から石坂式は、鹿村野地区の周辺も含め、殆ど認められない。

なお、前葉と考えられる別府原タイプは、ズクノ山第2遺跡E地区で大量に出土した。この土器は、椎屋形第2遺跡からも主的に出土しており、川の両岸に、大規模な集落が展開していたようである。なお、別府原タイプは、ズクノ山第2遺跡F地区でも確認できる。ちなみに時屋地区では、この土器群は極めて希薄な状態である。

中葉の下剥峯式は、E地区では数個体しか出土しない。一方で、F地区の北側斜面上では多く確認されていることから、集落の移動が考えられる。下剥峯式期から桑ノ丸式期にかけて、F地区では、30基以上の集石遺構と、3基の炉穴が構築されたようである。この時期、集落内では貝殻文系土器群に加え、押型文土器も同程度製作された。その他に、中原式土器(注5)、撫糸文土器、綱文土器も持ち込まれ、文様もさかんに合成されたことが、出土土器から明らかとなっている。なお、前ノ原第2遺跡では、早期中葉の貝殻文系土器群が全く出土しないため、集落の一次的な放棄が窺える。時屋地区では、白ヶ野第2・第3遺跡で人規模な集落が登場し、多量の遺物が出土しているが、主体を占めるのはあくまで押型文土器であり、貝殻文系土器群はごく少量であるなど、鹿村野台地とは異なる様相が見られる。

後葉の平柄式期は、F地区での出土量が激減する一方で、暫く放棄されていた前ノ原第2遺跡において、再び集落が戻ったようである。続く塞ノ神式は、ズクノ山第2遺跡F地区で局地的な出土が見られた。なお、早期中葉には、集落廃絶後のズクノ山第2遺跡E地区の北部において、用途不明の土坑列が構築されている。

末葉は、ズクノ山第1遺跡で森I式が確認されていることから、更なる集落の移動も考えられる。しかし、出土はあくまで少量であり、台地全体で集落が解体した様子が窺える。周辺では、時屋地区白ヶ野第2・第3遺跡において、中葉から続く集落が継続するようである。

次頁の表1は、各遺跡の縄文時代早期土器を型式別に表したものである。なお、参考として、椎屋形第2遺跡と白ヶ野第2・第3遺跡も含めた。この表を見る限り、縄文時代早期における鹿村野台地は、出土量に変化がありながらも、下剥峯式を境としてズクノ山2E→ズクノ山2Fと変遷した様子が窺える。しかし、別府原タイプを共伴例どおり加栗山式、中原Ⅱ・Ⅲ式併行とすると、吉田式期から倉団B式期にかけて、鹿村野地区では集落が廃絶したことになる。別府原タイプは、どの時期に属するのか、いつまで作られたのか、集落の様相を知る上でも検討が必要である。一方、南部の前ノ原第2遺跡は、下剥峯・桑ノ丸期に空白があるものの、小規模ながら恒常的な集落が営続したと考えられる。

土器以外の侧面を、ズクノ山第2遺跡のE地区とF地区の比較から論じたい。

石器は、E地区から250点、F地区から80点が出土する。この二遺跡からは、磨石も多量に出

表1 繩文早期遺跡別遺物出土状況(◎:50点以上 ○:5点以上50点以下 △:5点以下)

土器型式	薄手無文 初期	押型文 式	前平式 貝殻刺突	前平式 工具刺突	加賀山式	別府原タイプ	石坂式	下剥型式	桑ノ丸式	押型文後期	中原式後期	縄文系文	炒見式	天道ヶ尾式	平格式	寒ノ神式	苦浜式	録石橋式	轟I式	
ズクノ山2E	○ ○ △				◎ △ ○ ○					△					△ △					
ズクノ山2F				△ △ ○			○ ○ ○ ○			△ ○ ○ ○	△ △ ○ ○	△ △ ○ ○	△ △ ○ ○	△ △ ○ ○	△ △ ○ ○	△ △ ○ ○				
ズクノ山1					△				△ △	△						○ △		○		
前原2	○	△ ○		○						△	△	△	△	△	△	○ △		△ △		
椎屋形第2		△ △ ○ ○	○ ○ △	△ △ ○ ○			△ ○ ○ ○													
白ヶ野2・3				○ △			○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○		△ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	

*同一個体については、1点として数えた。

土しており、動物質食料と植物質食料の両方を積極的に摂取した、当時の食糧事情が窺える。

表2・3は、ズクノ山第2遺跡E地区とF地区の出土石器の形態を比較したものである。これを見ると、E地区は、F地区よりも長さ・幅共に、小さい部分にドットが集中する。また、E地区のほうが集中した分布をしており、F地区よりも規格性が高いことが窺える。基部の抉りは、E地区では0.3cm以下に集中するに対し、F地区は0.3~0.7cmに集中が認められる。こうした形態の違いは、時期差に起因すると思われる。

表4・5は、石器に用いられた石材を比較したものである。E地区では、黒曜石の占める割合が全体の7割以上にも達するのに対し、F地区では5割未満であり、チャート類とほぼ同じ割合でしかない。黒曜石の原産地は、E地区では、黒曜石Aが卓越し、全体の9割以上であるのに対し、F地区では約3分の2と減少する。この中には、E地区では含まれなかった、針尾島や多久などの西北九州産のものも含まれており、F地区で主体的な出土を見る早期中葉に、黒曜石の流通圏が拡大するという、これまでの定説を踏襲する結果が得られている(註6)。

石斧は、E地区では多彩な刃部を持つ石斧が多量に出土したが、F地区は1点のみと、出土量に大きな差が見られた。なお、スクレイパーなどの石製品は、どちらも貧弱であった。

集石遺構は、E地区では、扁平な礫を用いて、配石を伴うものが多いが、F地区では同様の礫を底石として使用するものが多い。なお、周辺の出土遺物から早期後葉と考えられる、ズクノ山第2遺跡F地区のSI-34は、配石を伴わないことから、これまで言われていたような(註7)、構造の簡略化を辿ることができる。

これまでの調査によって、繩文時代早期の田野盆地は、前平・元野・八重など、河川の付近に広がる台地を選んで、集落を営んでいたことが明らかとなっている。鹿村野地区も同じ立地条件であり、河川沿いに連なる椎屋形や時屋、船引の集落と影響をうけ合いながら、変遷して

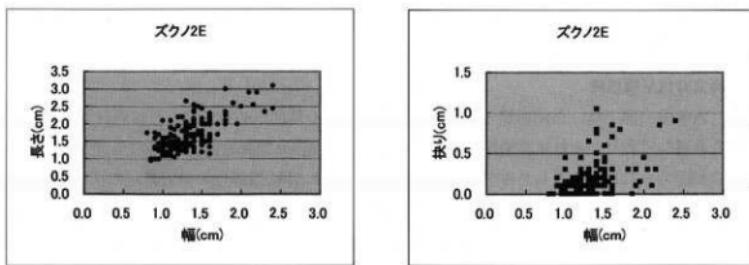


表2 ズクノ山第2遺跡E地区出土石器形態散布図

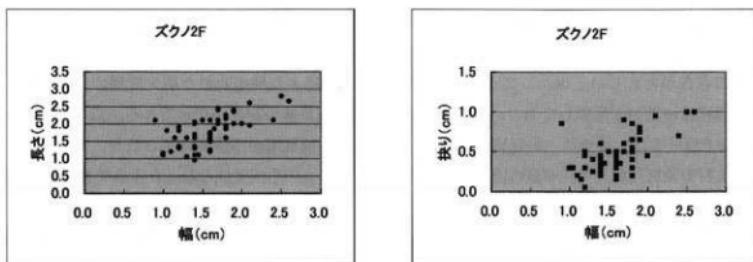


表3 ズクノ山第2遺跡F地区出土石器形態散布図

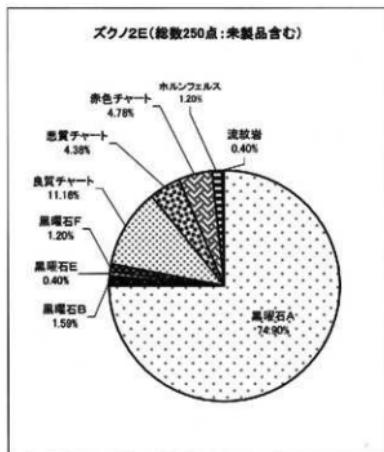


表4 ズクノ山第2遺跡E地区出土石器石材割合表

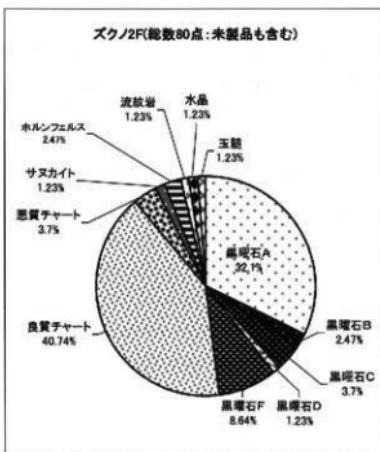


表5 ズクノ山第2遺跡F地区出土石器石材割合表

いった過程を見ることができる。

縄文時代早期以降

宮崎県央部では、前期初頭の遺跡が極端に減少する傾向があるが、これは鹿村野地区一帯にも共通しており、それまで継続的に遺物が確認できた白ヶ野第2・第3遺跡でも、土器型式の空白が認められる。こうした中で、船引地区的滑川第1、第2遺跡において轟B式が出土していることは注目に値する。時屋地区では、白ヶ野第2・第3遺跡において、前期後半に再び戻った集落が、中期初頭に空白を置きながらも、晚期に至るまで継続する。上の原第1遺跡では、中期に30軒近くの堅穴住居を伴う集落が存在したほか、前期、晚期の遺物も少量確認されている。上の原第2遺跡では、岩崎式～納屋向式にかけて、40軒以上の堅穴住居を伴う集落が検出された。このように、時屋地区は、早期以降も引き続いて集落が出現する。一方、鹿村野台地は、既に遺物包含層が消滅した部分が多く、詳細は不明である。しかし、前ノ原第2遺跡において検出されたピット群はおおよそ前期にあたり、明確なプランは認められなかったものの、掘立柱建物の存在が考えられるほか、ズクノ山第2遺跡A・B地区より検出された縄文後期のピット群は、規模は小さいが密集しており、掘立柱建物の立ち並ぶ集落の存在が想定できる。ズクノ山第2遺跡F地区では、曾畠式、船元式、中津式、岩崎式が、攢乱層から少量確認された。このように、鹿村野地区は縄文時代早期以降も、たびたび先史時代人の生活空間となったようである(註8)。

鹿村野地区及びその周辺は、旧石器時代から縄文時代を通して、幾度も集落の離合集散が繰り返された地域である。これは、河川の合流地点であり、良好な台地の連なるこの一帯が、狩猟・採集生活を行う上で理想的な環境であったことを示している。

(註)

- 1：九州旧石器文化研究会 2000「九州の縄石器文化」『第25回九州旧石器文化研究会資料集』
- 2：下山覚・雄田洋昭 1999「水道式土器の設定」
『第6回 企画展示「ドキドキ縄文さきがけ展」図録』
- 3：曾畠光博・上田耕・雨宮瓈生 1993「貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係」
『南九州縄文通信』No.7
- 4：遠部 優 1998「川原田式土器小考」『おおいた考古』第9・10集
- 5：熊本県教育委員会 1996「蒲生・上の原遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第158集
- 6：島田正治 1998「黒曜石から見る交流の一様相」『南九州縄文通信』No.12
- 7：八木淳一郎 1994「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信』No.8
- 8：この他、縄文時代の遺物としては、前ノ原第2遺跡の隣接地から採集された抉状耳飾がある。この遺物は、それまでの事例から縄文時代前期以降と判断していたが、近年、高岡町や清武町において、縄文時代早期の包含層より出土する例が確認されていることから、時期の断定は避けたい。

(参考文献)

- 宮崎県埋蔵文化財センター 1997 「霧島遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第4集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 「上の原第3遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第13集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000 「上の原第2遺跡 上の原第1遺跡 上の原第4遺跡
白ヶ野第3遺跡A地区」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第25集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 「白ヶ野第2・第3遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第52集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 「別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第2遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第61集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 「白ヶ野第2・第3遺跡 上の原第1遺跡(B地区)」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第62集
- 宮崎市教育委員会 1996 「椎屋形第1遺跡 椎屋形第2遺跡 上の原遺跡」
- 清武町教育委員会 1997 「白ヶ野第1・第4遺跡」『清武町文化財調査報告書』第5集
- 清武町教育委員会 1998 「清川第1・第2遺跡-1・-2 清川第3遺跡」『清武町文化財調査報告書』第6集
- 清武町教育委員会 1999 「清川第1遺跡-2・清川第2遺跡-2」『清武町文化財調査報告書』第7集
- 清武町教育委員会 2000 「山田第1・山田第2遺跡」『清武町文化財調査報告書』第8集
- 田野町教育委員会 1986 「芳ヶ迫第1遺跡 芳ヶ迫第2遺跡 芳ヶ迫第3遺跡 札ノ元遺跡」
『田野町文化財調査報告書』第3集
- 田野町教育委員会 1994 「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第19集
- 田野町教育委員会 1996 「水道第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第21集
- 田野町教育委員会 1998 「鹿毛第3遺跡」『田野町文化財調査報告書』第28集
- 田野町教育委員会 2001 「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集
- 田野町教育委員会 2001 「黒草第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第40集
- 田野町教育委員会 2001 「ズクノ山第1遺跡」『田野町文化財調査報告書』第41集
- 田野町教育委員会 2002 「ズクノ山第2遺跡F地区」『田野町文化財調査報告書』第43集

報告書抄録

ふりがな	か むら の ち く い せき			
書名	鹿村野地区遺跡			
副書名	県営畠地帯総合整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			
シリーズ名	田野町文化財調査報告書			
シリーズ番号	第44集			
著者名	森田浩史 金丸武司			
発行期間	田野町教育委員会			
所在地	〒889-1795 宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地			
発行年月日	2003年3月			
所収遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
前ノ原第2遺跡	宮崎県宮崎郡田野町乙鹿村野	1998, 7, 23~12, 21	2, 800m ²	農業関連
ズクノ山第1遺跡	同上	1999, 9, 1~12, 28	5, 650m ²	農業関連
ズクノ山第2遺跡A-C地区	同上	1997, 1, 16~3, 16	1, 300m ²	農業関連
ズクノ山第2遺跡E地区	同上	1998, 8, 11~12, 21	8, 800m ²	農業関連
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
前ノ原第2遺跡	集落跡	縄文時代早期 縄文時代後期・晚期 弥生時代 古代・中世	礫群・集石遺構 ピット群	無文土器、前平式土器、中原式土器、妙見式土器、平柄式土器 塞ノ神式土器、縄文系土器、黒色磨研土器、石鏃、石斧、磨石、抉入片刃、布痕土器、須恵器
ズクノ山第1遺跡	集落跡	縄文時代早期 弥生時代中・後期	礫群・集石遺構 堅穴住居 掘立柱建物 土坑	押型文土器、平柄式土器、塞ノ神式土器、苦浜式土器、鎌石橋式土器、石鏃、磨石、石皿、壺甕、土製勾玉、輕石製石製品
ズクノ山第2遺跡A-C地区	集落跡	旧石器時代 縄文時代早期・後期	ピット群	細石刃、岩崎式土器、石鏃、磨石
ズクノ山第2遺跡E地区	集落跡	縄文時代早期	礫群・集石遺構 土坑(列) ピット、配石遺構	無文土器、押型文土器、前平式土器、貝殻条痕文土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、平柄式土器、塞ノ神式土器、石鏃、尖頭状石器、石錐、石斧、二次加工剥片、使用痕剥片、磨石、石皿、用途不明石器、羊頭状石器、水晶片

遺跡を掘る

頭から被れけかさげさまの、手ぬぐでのとて現われにけり
鳴尾に流る汗と拭ひて、遺跡の土と振りては連す
遺跡掘るわざの背後は日除り炎夏まさしく、土の陰が差しくる
遺跡場の土と振りては捨てに行く、盛土の上に雨脚はやし
ビニールに包み、土と砂を仕込むのは月光がかるナメの匂か

遺跡場の男と女は余のむか跡跡と隣れ畠の田ざしま
達跡の午後の休みと女は夏着のねじ、炎夏持らなく
達跡するわざのまじへほどの春のかりづらで、いつも大事に
鹿村野の台地は丘、バラツルの陰の花園の達跡と振りぬ
炎威をも振けぬ小灰色の素の河原のねす達跡場

* 本町内の住人藤井氏がアクリ由第2遺跡と地区的発掘調査に、作業員として
て参加された時記録全文を掲載させていたたきました。

伊勢市文化財調査報告書第47号 鹿村野地区 遺跡

新潟県立宮崎高等学校実習教場伊勢市鹿村野地区に於ける文化財調査報告書

発行年月日 2003年3月31日

編集・発行 田代町教育委員会

〒889-1702 宮崎郡田代町甲2348

TEL FAX 0985(86)5160

印 刷 有限会社宮崎新生社印刷

〒880-0124 宮崎市新名川中牟田766

TEL 0985(39)6148